

「長久保赤水」という存在が以前から気になっていた。安南国漂流記を表し、『東奥紀行』では關卿井嶽の龍燈についても書いている。伊能忠敬より前に賢の高い日本地図を編集し、幕末には、吉田松陰が赤水の墓を訪ねたとい

うでも武士ではなさそうだ。学者だろうか。その経歴や仕事をみると、才能に溢れている。でも抑にはめることなどできない。そんな赤水のことを知りたくて、生まれ故郷高萩市赤浜を訪ねた。

赤水は一七二七年(享保二)に生まれ、一八〇一年(享和)学に励み、六十歳のとき侍講された。赤水は私塾に通って勉強した。赤水は私塾に通って勉強した。赤水は私塾に通って勉強した。



長久保赤水自画像 協力：高萩市教育委員会

一里の道のりが人生の原点

講義するようになる。農民出身者が侍講になるのは初めてのことだった。

そのころの水戸藩は財政が逼迫し、藩政改革を求められていた。父が酒におぼれて自死し、十五歳で藩主になった治保は、郡奉行を四人から十人に増やして農民の生活状況を調べさせた。そうした奉

「芻は草、藎は木のごとで、芻刈りや木を切る者の話」という意見書がある。赤水が皆川に提出した「芻藎談」という意見書がある。

商人に替替したり、博打を横行していた。農業を離れてのしかかってきて、間引きがこのころの農業は芳苦ばかりが農民の立場にこだわった。その意味を込め、あつまで

「七年の病気に三年のよもぎ」ということわざを例に出し、すぐに結果が見えなくても何年かあとには効果が出るはず。日々、人の命を救うこと

を講義が終わったあと、文部省に力を入れていた治保から「大日本史」の地理志編纂を命じられた赤水は江戸に留まり、八十歳になってや

あつまで通った松塾。その一里、肉親をすべて失い、継母の当時の面影を残している。

「草刈りや木を切る者の話」という意見書がある。赤水が皆川に提出した「芻藎談」という意見書がある。

商人に替替したり、博打を横行していた。農業を離れてのしかかってきて、間引きがこのころの農業は芳苦ばかりが農民の立場にこだわった。その意味を込め、あつまで

「七年の病気に三年のよもぎ」ということわざを例に出し、すぐに結果が見えなくても何年かあとには効果が出るはず。日々、人の命を救うこと

主な記事	戸惑いと嘘⑤⑩	もりもりくん①	ぼくの天文台Ⅱ
	内山田 康	カタツムリの観察日記	ひかるもの 粥塚伯正
	2.3	松本 令子	12

〒970-8036 いわき市平谷川瀬一丁目12-9
白の新聞

TEL・FAX 0246(21)4881 MAIL hib@3.dion.ne.jp
URL http://www.hibinoshinbun.com/

長久保赤水 特集ページ 6.7.8.9.10.11